
トゥッサン・デュブリユの下絵によるタピスリー連作〈ディアナの物語〉に関する考察

竹本芽依(東京藝術大学)

狩猟の女神ディアナは、16世紀のフランス美術において特権的な主題であった。それは国王アンリ2世の愛妾ディアヌ・ド・ポワティエの存在ゆえであり、彼女の姿はしばしばディアナに重ねられ、絵画や彫刻、さらにディアナの神話に取材したアネ城のためのタピスリー連作にも登場した。興味深いことに、同主題のタピスリー連作は約半世紀後、ブルボン朝の創始者アンリ4世の下で再び制作される。その下絵を担当したのは国王付き画家、トゥッサン・デュブリユ(1558/61?—1602)であった。王宮の改築や破壊によって作品の大半が消失している第二次フォンテーヌブロー派の芸術を知る上で、デュブリユのタピスリー連作は全体構想を把握できる数少ない作例として重要性を持つ。

制作依頼に関する記録の欠如により、先行研究では本連作の制作意図に関する考察が不明瞭なまま残されている。フランソワーズ・バルドン(Bardon 1963)の論考以降、本連作はアンリ4世の寵姫ガブリエル・デストレが「新しきディアナ」として表象されたものであると捉えられてきた。近年の展覧会カタログ(New York 2007/Paris 2010)の記述においても、この点について新たな見解は提示されていない。本発表では、アネ城の先行作例への依存が強調されるあまりやや無批判に受け入れられてきた解釈を見直し、デュブリユの連作独自の様式的性格およびその制作意図について再検討する。

発表者はまず、ほぼ同じ主題群を扱ったアネ城の連作との比較により、デュブリユがその表現を参考にしつつも、主としてラファエッロに由来する視覚的典拠を活用することで、より古典主義的な構図を志向していることを具体的に指摘する。

次に制作意図についてだが、本連作の下絵の制作時期は1597—1602年頃と推定され、これは1598年のナントの勅令を契機に国王の政治的課題が宗教戦争から後継者問題へと移行した時期であった。ガブリエルは1597年の時点で既にアンリ4世との間に2人の子どもをもうけており、国王は当時、彼女を正妻とすることを望んでいた。しかし1599年に彼女は他界し、1600年にアンリ4世はマリー・ド・メディシスと結婚、翌年9月には待望の王太子ルイ(のちのルイ13世)が誕生している。

こうした状況に照らせば、本連作の構想を、国王と愛妾をそれぞれアポロンとディアナに重ね合わせるアネ城の連作と同列に解釈することは適切とは考えられない。むしろ本連作のアポロンとディアナは、国王の子どもたちを暗示していたのではないだろうか。実際、本連作に関する最初の記録は、1606年の王太子ルイの洗礼式に際し、長女エリザベートの寝室に飾られていたことを伝えている。この事実は、当初アネ城の連作を下敷きに企画された本連作の意味が、アンリ4世を取り巻く状況の変化に呼応して読み替えられていった可能性を示唆している。